
公爵と王女

くま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

公爵と王女

【Nコード】

N0580Z

【作者名】

くま

【あらすじ】

「褒美を取らせる——王女を妻に迎えよ」

王のその一言で滅んだ国の王女を妻に迎えることになった公爵の話。

邂逅

——美しきエルバータ、白亜の城。

かつて歴史と繁栄の証、イーデン国の誇りと謳われたエルバータ城は今や廃墟と化した。

城内には活気にあふれた人の声どころか、嘆きの声すら聞こえない。

あるのはカツカツと床を叩く軍靴の音と、別の国の言葉。

「陛下、この先でございます」

此度の戦では先陣を切り、エルバータ城に入城した將軍が恭しく先導する相手は、ただ一人の主たるフェイアン国王だ。

齢五十を目前にしながらもその足取りに乱れはなく、つい先ほどは見事な剣技を披露してみせた。

ためらうことなくイーデン王を下した姿に誰もが忠義心を深めた。そのうちの一人である、フレイヴィアスは重い気を引きずりながら、先を行く主、同じく近衛騎士を拝命している同僚の背中を最後尾から眺めた。

「この扉の先です」

彼らの王、將軍、王の護衛たる近衛が向かう先は、ただ一つ。

落城したエルバータ城の中で唯一、落とされなかった場所。

死を目前にしたイーデン王の口から語られたその場所は、道を知る者にしかたどりつけない場所であり、イーデン王が何よりも隠したかったものが収められた場所だ。

將軍が扉を開ける際に王は、下がり、代わりに未だ手柄を立てていない近衛が野心を持って前へと進み出る。

すでにイーデン国の王太子の首を跳ねたことにより誰よりも手柄を立てたフレイヴィアスは、相変わらず最後尾にいた。

ギイ、と黒色の重厚な木扉がゆっくりと音を立てて開き、室内の様子が露になる。

「……っ」

そば近く、誰かが息を呑んだ音を聞きながら、フレイヴィアスじつと室内の一点を見つめた。

室内は、少し薄暗かった。

凡そ貴人の部屋とは思えぬほど室内は狭く、中に置いてある物は中央に寝台が一つきりしかなかった。

後宮に住まう身分低い妾ですらもっとまともな部屋を持っているだろう。

それほどこの部屋異様だった。

そして何よりも部屋の中央にある寝台の淵には腰掛ける一人の女の姿があった。

女を警戒する以前に誰もが彼女に見惚れた。

薄暗い中はつきりと浮かび上がる波打つ黄金の髪、大きな緑色の瞳、白いドレスから僅かに覗く肌は白く透き通るようだ。

未だ少女といってもいい年でありながら傾国と謳われてもおかしくない美しさだった。

一同が立ちすくむ中、進み出たのは下がっていたフェイアン王だった。

「ああ、間違いない……エリーザ姫だ」

フェイアン王の言葉にその場にいた者ははっと我に返った。

そして慌てて王の後に続いて室内へと足を踏み入れる。

エリーザと呼ばれた王女は微かに目を伏せ、頷いた。

「……お久しぶりでございます、陛下」

王女の美しい容貌に似合いの軽やかな声音。

しかし、寝台に腰掛けたまま口を開いた姿にフェイアンの者たちは眉をひそめた。

——痴れ者が、己の立場も分からぬとは。

誰かがぼそりと呟いたが、それを咎める者はいなかった。

平素であれば一国の王女にこんな口を聞けばただでは済まないが、既に王女の国は彼らの国に滅ばされたも同然。

王女という身分など、ないに等しかった。

「——エリーザ、私がここに居る理由がわかるかな」

フェイアン王自身は、王女の態度を気にする風もなく、静かに問いかけた。

王女はその問いにやはり目を伏せたまま、頷いた。

「我が国が、貴国に負けたのでしょ」

「そうだ。イーデンの領土はすでに我がフェイアンの手に落ち、最後の砦であつたこのエルバータ城もつい先ほど落ちた。王太子であつたそなたの兄をはじめ、従兄弟らも皆処刑したばかりだ——もちろん王であつたそなたの父も」

王の言葉に王女の肩が微かに震えた。

だがそれだけだつた。

王女はこの部屋に入つたときから、ほとんど身動きしない。

不自然なほどに。

それに気付いた者がこの場に何人いるか、フレイヴィアスは黙したまま哀れな敗国の王女を見つめた。

「エリーザ。死に目にあえなかつた哀れなそなたにイーデン最後の王の言葉を伝えよう」

フェイアン王は、目を伏せたまま上げようとしない王女に笑みを向けた。

柔らかでありながら、残酷さを秘めた笑みを。

「——どうか王女の命だけは奪わないで欲しい」

一国の王が、己の国を滅ぼす王に泣いて縋つてまで願つたこと。それ以外は望まない、と息子である王太子の遺体など目に入っていない様子で娘の助命を請う姿は異様ですらあつた。

己で王太子を手にかけておきながらフレイヴィアスは彼を哀れに

思ったほどだ。

王女は、王の言葉に伏せていた目をぎゅっと閉じ、両手のひらを握り合わせた。

命を落とした父王の冥福を祈るためなのか、それともこれからの己の処遇を憂いているだけなのか。

その姿は弱弱しく、儂げだった。

手柄のために王女の首を奪う気でいた者ですらためらいを覚える。だが王はその姿に惑うことはなく、嗤うのみ。

「イーデン王はよほどそなたを愛していたと見える。息子などよりも娘であるそなたを——いや、娘ではなく女としてか」

暗に親子の関係を揶揄する王の言葉に王女は相変わらず動かない。両手のひらを握ったまま目を閉じるだけ。

「否定もせぬとは……何ともつまらないことだ」

王は呆れたように呟いた後、おもむろに足を踏み出した。

突然の行動に誰もが対応に遅れた。

王は一人悠然と寝台に腰かける王女へと歩み寄ると、その左腕を掴み上げた。

「陛下?!」

將軍らが声を上げる中、抵抗する間もなく王女の体は寝台から浮き、直近の床へと叩きつけられた。

肉が床とぶつかる音がして華奢な体が倒れ、ふわりと白いドレスが広がる。

しどけなく乱れたドレスの裾からは真つ白な脚が現れた。

誰もが息をのんで肌の美しさに見入り、しかし次いでほっそりとした足首に巻かれた銀の鎖に目を剥いた。

やはりな——と呟き王は顔を歪めた。

「愛など度が過ぎると醜悪でしかないものだな」

誰が想像できるだろうか、一国の王女が囚人のように鎖に繋がれているなど。

そして王女を繋ぐことができる人物は、ただ一人——彼女の

父王しかない。

同時に聡い者は気付くのだ。

彼女が寝台から身動きしなかった理由が、これの存在のためである。

王に不敬を働いてまで隠したかったもの。

もしかしたら王女は、最初の王に対する態度を不敬として処刑されることすら望んでいたのかもしれない。

なぜそうまでして隠したかったのか。

フレイヴィアスは一人考えを巡らせた。

見つめる王女は屈辱のためか、羞恥のためか唇を噛みながらもろのろと体を起こした。

か弱い姿にも揺らぐ王は王女を見下ろした。

「エリーザよ、なぜこの鎖を隠した」

「…………くだらない理由です。陛下にお聞かせする価値もありません」

「構わぬ、言え」

首を振るも追及の手を緩めない王に王女は諦めたように微かに首を振った後、床に座り込んだまま顔を上げた。

白い面には何の感情も見えなかったが、ただ伏せられたままだった緑の瞳だけが強い光を宿していた。

しっかりと王を見据えながら、

「己の王女としての誇りのためです」

揺るぎない口調で言い切った。

鎖に繋がれた醜悪な姿、それを晒すぐらいならば不敬として敵国の手にかかるほうがよいと。

自害を禁忌とするイーデン国最後の王女は、言い切ったのだ。

フェイアンの者たちはこれほど美しい者を他に見たことがなかった。

そして同時に惜しいと思った。

滅んだ国の王女ではなくなぜ自国に生まれなかったのかと。誇り高い姿に初めて王は心からの笑みを浮かべて頷いた。

「見事だ、それでこそイーデン最後の王女」

満足げに呟いた後、王は一度目を閉じた。

そして一転次に目を開けて告げた言葉は、

「——それでは、そろそろあなたの処分を言い渡そうか」

ひやりとしたものを纏っていた。

王の言葉にフレイヴィアス以外の者は息を呑んだ。

処分、それによつては己の立てる手柄が増える。

皆が固唾をのんで見守る中、王は淡々と言葉を続けた。

「イーデン王は、そなたの助命を請うたが、滅ぶ国の王の言葉を聞き入れる義務などない。私は、民を虐げる王族、貴族に生きる価値などないと思っている」

「……………」

「それゆえ、王を諫めることすらしなかった王女など救う気などなかったが——己の処遇を理由に命乞いをしなかったそなたを見て気が変わった」

王は微笑した。

「処刑は行わぬ」

誇り高い王女の姿が王の心を動かしたのだ。

王の宣言をフェイアンの者たちは残念に思った。

これで手柄を立てる機会を失った。

だが王の次の言葉に色めき立つ。

「だが、処刑の代わりに降嫁させることにする」

既に滅んだ国の王女の身分など何の価値もない。

しかし後々の火種にならないよう降嫁させて王女の身分を奪うのだ。

美貌の王女を妻とすることができないかもしれない——そのことを期待してフレイヴィアス以外の者は唾を飲み込んだ。

「異論は許さぬぞ」

敗戦国の王女に反論など端から許されない。

王女は顔をうつむかせ、頷いた。

フェイアンの者もまた王に恭順の意を表した。

王は腕を組み、王女に問う。

「降嫁先だが、望む相手はあるか」

王女はうつむいたまま首を振った。

「ございません……」

そう言ったあと、ですが、と口の中で呟いた。

「申せ」

「では……許されるならば、未だ奥を持たぬ方を望みます」

未婚者を望む王女の言葉は思いも寄らなかつたらしく王は瞬いた。
「それはなぜだ」

「……私の存在は、迎えるてくださる相手の方に多大なご迷惑をおかけするでしょう。未婚の方のほうが既婚の方よりもそれが少しでも少ないのではと。浅知恵ではございますが」

確かに既婚者よりは未婚の者のほうが何かと都合がよいだろう。

イーデンもフェイアンも妻を多数持つことは認められているが、正妻と妾とは立場にかなり差がある。

王女を迎えれば必然的に王女が先に迎えた妻を押し退けて正妻の座に座ることになる。

夫は美貌の王女を喜んで迎えるかもしれないが、妻は陰で泣くことになるだろう。

なるほど、と王は頷き思案した。

今のところ王女の望みを退ける理由はない。

「分かった。では未婚の者を選ぶでしょう」

王の言葉に既婚者であるフェイアンの者はあからさまに失望したようだった。

反対に未婚者は期待の眼差しを王へと注ぐ。

未婚者の一人であるフレイヴィアスは嫌な予感がしていた。

フレイヴィアスには他の者のように王女を望む気はさらさらない。最後尾、王の視界に入るような位置ではないが。

だが、嫌な予感とはなかなか外れないもので、

「フレイヴィアス」

王は微笑を浮かべて振り返った。

同時にフェイアンの者が動いて王とフレイヴィアスを遮る者がなくなる。

「……はい」

心臓は嫌な音を立てていたが、声に変わりはなかった。

「未だ独り身であつたな」

「……はい」

「そして此度の戦では民に紛れた王太子を見つけ出して処刑した功労者でもある」

続く言葉は阿呆でも予想がつく。

背中を汗が伝う。

「褒美を取らせる——王女を妻に迎えよ」

その言葉をどこか遠いところで聞いた。

だが長年の習慣で自然と身体が動き、膝について頭を垂れていた。

「有り難き幸せ」

意思とは関係なく動いた唇に王は満足げに頷いた。

垂れた頭に向けられるのは周囲からの多大な嫉妬だった。

代われるならばフレイヴィアスとて代わりたい。

だがそんなことが許されるはずがない。

恐る恐る顔を上げたフレイヴィアスの目に飛び込んできたのは床に座り込んだままの王女。

「エリーザ、これがお前の夫となる男だ」

王の言葉に王女の緑の瞳がフレイヴィアスへと向けられる。

まっすぐに居心地が悪くなるほど汚れないその瞳と初めて目が合う。

——これがフレイヴィアス21歳、エリーザ16歳の出会いだった。

降嫁

真っ白な敷布に豊に広がる金糸。

金糸の下から覗く朝日に輝く肌は白く、美しい。

恥じらいながらも微かに上がる色を含んだ声は、艶やかだった。

そして何より——破爪の証。

それがあつたことにひどく驚いた。

「私は……フレイヴィアス・グランティール、フェイアンでは公爵の地位にある者です」

なんとも間抜けな自己紹介からの始まりにフレイヴィアスは内心頭を抱えた。

唯一凱旋の列から外れ、公爵家へと向かう狭い馬車の中、正面に座った王女はフレイヴィアスの言葉に黙したまま長い睫毛を瞬かせた。

つい11日前に褒美として賜ったこの王女をフレイヴィアスは早々からもて余していた。

——同盟国であつたイーデンが何を考えたのかフェイアンへと宣戦布告をしたのが1年前、フェイアンの侵攻の手がイーデンの王都まで伸びたのか1か月半前。

その王都も陥落しようかという目前、フェイアン王自らエルバータ城へ赴くとの宣下が下り、王の近衛を務めるフレイヴィアスも戦場に立つことを余儀なくされた。

騎士となつたからには戦場に赴くことなど当然と考えていたため、異論や不満はない。

人を手にかけることに罪悪感が全くないわけではなかったが、それでも己と尊き王のために幾多のイーデンの者を殺した。

だが、誰が戦に赴いた後——褒美として王女を宛がわれるなどと想像できただろうか。

制圧された王宮内で、捕えられた使用人の中に紛れていた王太子を見つけ出してしまったのがよくなかったのかもしれない。

見つけ出し、首をはねさえしなければ。

——そう、フレイヴィアスは王女の兄である王太子を殺したのだ。

そのことは王の口から告げられ、王女も知っている。

王女は、どう思っているのだろう。

己の国を滅ぼした国の人間、何よりも己の兄を手にかけてた男のことを——。

思えばこの王女と顔を合わせるのは、実に10日ぶりである。

王から直々に王女を娶るよう命じられたフレイヴィアスであるが、だからといってあの場ですぐに婚姻を結ぶことはありえない。

フレイヴィアスにはフェイアンに戻るまで近衛としての仕事があったし、王女はフェイアンまで身柄を拘束されていた。

それゆえ、王都に入った途端に凱旋の列から外れて本邸へ直帰するよう命じられたときには驚いたものだ。

王直々の命でなければ理由をつけて拒否するところだが、已むを得ず王女が乗せられている馬車に自身も乗り込み帰宅の途に就いたのであった。

10日ぶりに顔を合わせた王女は、乗り込んだフレイヴィアスに僅かに目を見開いただけで、それ以上の動きはなかった。

今も淡々とフレイヴィアスをの説明を聞き、時折静かに相槌を打つだけ。

人形のようにだった。

「……………これから向かっているのは、王宮の東にあるグランティー

ル家の本邸です。私には既に両親もありませんし、もともと兄弟もいませんので誰に気兼ねすることなくお過ごしください」

王宮の東西には貴族街があり、その中でもグランティール家は東の貴族街の一等地に居を構えている。

その建物もフレイヴィアスの祖父が当時のフェイアン王女を娶るに当たって改修したため、どの家にも劣らないものである。

既に祖父母も父母もなく、妻妾を持たないフレイヴィアスにはもて余すほどに広く立派すぎるが、滅んだとはいえ一国の王女を迎えるのに何ら支障はない。

「家財で気に入らぬものがあれば、何なりとおっしゃってくださいばお望みの物を用意いたしましょう」

部屋は、王から命が下った後にすぐに使いを出して亡き母が使っていた部屋を整えさせている。

傷んでいる物は取り替えさせているが、趣味が合わなければそれも取り替えることになるだろう。

幸い両親も祖父母も浪費癖はなかったし、蓄えはある。

王女がよほどの浪費家でない限り、困ることはないだろう。

ありがとうございます、と目を伏せる王女はそれ以上は何も言わない。

「……いえ」

フレイヴィアスもまず説明しておかなければならないことは、終わった。

もともと寡黙なほうであるフレイヴィアスには気の利いた会話や冗談を言う技術はない。

必然、馬車の中は沈黙が支配し、重苦しい。

これから先のことを思うと、憂鬱で仕方がないフレイヴィアスだった。

沈黙の馬車がグランティール家へと辿りつき、その足を止めたの

は夕刻だった。

御者台から降りた従者が扉を開けると、まずフレイヴィアスが外へと降り立った。

邸宅の玄関に家の者が居るのを確認したあと、続いて降りる王女へと無骨な手を差し出すと、真つ白な手が軽やかに乗せられ、中から静かに彼女が出てきた。

慣例通り出迎えに出ていた使用人の多くは王女の容貌に声を失い、礼を失しかけたがすぐさま立て直した。

そんな彼らの中から進み出たのは、父の代から執事を務める男だった。

王女の手を引いたままフレイヴィアスは、執事へと短く帰還を告げた。

執事は主人の様子に嬉しそうに目を細め、

「ご無事で何よりでございます、旦那さま」

頭を垂れるのと同時に他の者が一斉に頭を下げる。

フレイヴィアスは彼らに労いの言葉をかけると、次は王女へと向き直った。

「これが当家の者たちです。何かあればまずあの執事のローグにお申し付けください」

フレイヴィアスの声を受けて執事が王女に頭を下げる。

「よろしくお願いいたします」

王女が執事に小さく頷いたのを確認した後、フレイヴィアスは再び家の者たちへ目を戻す。

既に王女を連れ帰ることは知らせてあるが、これも慣例だ。

「——この方は、私に降嫁してくださるエリーザ姫であらせられる。失礼などないよう、心からお仕えするように」

フレイヴィアスの簡潔だが反論を許さない言葉に皆先ほど同じように頭を下げて恭順の意を表した。

それを見届けてからフレイヴィアスは王女の手を引いて邸内へと足を進めた。

「2階に部屋を用意しております。代々の公爵夫人が使っていた部屋で、以前は母が使用していたため気に入らぬ物もありでしょう。先ほども申しましたが、気に入らぬ物はおっしゃってくださいれば取り替えさせましょう」

説明しながら2階へと続く階段へと足を進める。

2階へは邸内にある複数の階段から上がることができるが、これから案内する部屋へは邸内の奥に設置されている階段からしか上がれない。

その説明をしようとしたとき、遮るように王女が初めて口を開いた。

「……………あの、フレイヴィアさま」

口を開きかけていたフレイヴィアスは初めて呼びかけられたことに驚き、足を止めて思わず王女の顔を見た。

大きな緑色の瞳が、どこか困惑したような色を浮かべていた。

「よろしかったのでしょうか……………私自身は、この家の方々にご挨拶を申し上げておりません」

「……………」

「私は無知ゆえ、婚家へのご挨拶の作法も存じません。ですが、初めて会う方にご挨拶も申し上げないのは失礼に当たるのではないのでしょうか」

静かな声で紡がれる王女の言葉にフレイヴィアスは失敗したことを悟って言葉を失った。

確かに王女と使用人との間の身分の隔たりは非常に大きいが、だからと言って頭を下げる者に対して何も返さないのは傲慢であり、愚かなことだ。

それを自分は王女にさせてしまったのだ。

無知はフレイヴィアスのほうだった。

早くあまり失念していたなど言い訳でしかない。

「……………ご意志を確認することなく進めてしまうなど、失態以外の何ものでもありません。エリーザ姫、どうかお許しください」

即座に床に片膝をつき、頭を垂れると、目の前の王女の足が僅かに後ずさった。

「おやめください、私はフレイヴィアスさまに謝罪されるような身ではありません」

小さな悲鳴のような声音で言った後、王女もまたフレイヴィアスの前に両膝をつき頭を下げ始める。

「詮無いことを申し上げました、私のほうこそお許しを」

「エリーザ姫、私などに頭を下げてはいけません。あなたはイーデンの王女なのですから」

慌てて王女を立たせ、自身も立ち上がる。

必然己の胸元までしかない王女は、フレイヴィアスを見上げる形になる。

「いいえ、イーデンは既に滅びました。もう私は王女と呼ばれる身分ではありません」

きつぱりとした口調と、強い緑の瞳にフレイヴィアスは僅かに気圧される。

「私はフレイヴィアスさまが敬意を払われるような身ではございません。どうか私のことは、ただのエリーザと」

「それは……では、私にも敬称は必要ありませんので、」

「いいえ、それはできません。私はフレイヴィアスさまに仕える身です」

はつきり言い切る口調と瞳の何と強いことか。

フレイヴィアスは、それ以上の言葉を失った。

——本当に、滅んだ国の王女であることが非常に惜しいと思う。

強い瞳で見上げてくる王女をフレイヴィアスは黙って見つめていたが、遠巻きに主人たちの様子を眺める使用人たちの姿に気づき、二人は我に返った。

「……………案内を続けましょう」

「……………お願いいたします」

お互いに取り繕うように言うと、再び足を進めて王女の部屋へと向かった。

階段を上がり、2階の奥へと足を進めると白い扉の前には二人の侍女が控えていた。

主人の姿を見ると、一度頭を下げた後ゆっくりと扉を開く。

途端に飛び込んでくるのは、眩しいまでの赤い光。

大きな窓から差し込む夕日だった。

「ここが使っていただく部屋になります」

真っ赤な色に染まる室内は広く、最高級の調度品で溢れていた。

——王女がいた、あのエルバータ城の部屋とは比べものにならない。

王女は黙ったまま室内へと目向けていた。

「隣が寝室で、寝室は私の私室とも繋がっています」

つまりは、フレイヴィアスも使うという意味である。

その意味は分かっているだろうが、王女は相槌を忘れて、目を瞬かせて室内を見回していた。

王女の様子に、フレイヴィアスは少し不安になった。

「……お気に召しませんか」

その問いかけに、王女はようやくフレイヴィアスを見上げた。
ふるふると首を振り、

「いいえ、私にはもったいないくらい立派だと……」

ただ、と言いよどむ。

フレイヴィアスは視線でもって王女に先を促した。

見上げる緑の瞳を少し伏せた後、呟いた。

「考えていたのです」

「……何をでしょうか」

その先の言葉は、フレイヴィアスには思いも寄らないものだった。
そして、困惑以外の何ものでもなかったが、口にした王女自身も
ひどく困惑していた。

いや、途方に暮れていたというべきか。

「私はこの立派な部屋で……これから何をすれば良いのでしょうか」

答えは——フレイヴィアスにも分からない。

しばらくの間、二人は無言のまま見つめ合っていた。どちらも答えを口にすることなく。

その翌日、式を挙げることも祝宴を開くことも誰かを招くこともせず。

——フレイヴィアスは、王女を妻とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0580z/>

公爵と王女

2011年12月2日23時50分発行